

長高新聞

佐藤さん地オリで銅賞

昨年のリベンジ果たす

3年7組の佐藤峻人さんは、3月15〜17日に茨城県つくば市にて開催された第18回日本地学オリピック本選に出場し、銅賞を受賞した。日本地学オリピックは一次予選・二次予選・本選で構成されており、二度の予選で行われるマーク型試験の合計点数で本選出場可否が決まる。なお、一次予選に出場した1433人のうち、本選に残ったのは67人。そのうち10位以内が金賞、11〜20位が銀賞、21〜40位が銅賞をそれぞれ受賞した。

佐藤さんは昨年も本大会に出場していたが、その時は二次予選で敗退。「去年より勉強して臨めた」という今年

の得点は、一次予選が55/60点で二次予選が82/100点、合計137点と、昨年より20点高い点数を獲得し、余裕をもって本選へ進むことができた。

本選は2泊3日の合宿形式。2日目の午前に行われる試験では、地質や気象など6つの分野に関する記述式の問題を解く。佐藤さんは今大会に向けて、基本的に図表や参考書を活用して学習してきた。ただ、実際に標本を見て問題を解く「標本鑑定」に関しては、地学教室にある化石の標本を見たり、上野にある国立科学博物館を訪れたりなど対策をした上で臨んだ。

「金賞や銀賞はレベ

第706号
デジタル
ダイジェスト版
発行元
長野県
長野高校
新聞部



賞状と記念の盾を持つ佐藤さん

ルが違うので」と銅賞を目標にしていた佐藤さん。最終日の表彰式で結果が発表され、銅賞だと分かった時には「信じられず、現実が受け入れられないという感じ」だったと嬉しそうに語った。

大会を振り返り、佐藤さんは「交流会などを通してレベルの高い人たちから刺激を受けられたし、自分の力がどれくらい通用するのかが分かった。この経験が今後の地学の勉強にも生きていくと思う」と話した。

地学に興味を持った

部説 意識薄まる感染症対策

皆さんは「コロナ禍」という言葉を覚えていくだろうか。2020年頃から世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は、私たちの日常を大きく変えてしまった。それまでの当たり前は突然失われ、多くの人が不安を抱えながら毎日を過ごしていた。

2023年には新型コロナウイルス感染症はインフルエンザと同じ「5類感染症」に位置付けられ、大げさな対策をする必要がない感染症という認識となった。しかしながら、感染症への警戒や対策は

きつかけを「長野で生まれ育って自然が身近にあったことや子ども

いつでもどこでも意識する必要があるだろう。特にここ最近、クルーズ船内でのハンタウイルスによる集団感染が話題となっており、改めてそう感じた人も多いのではないだろうか。

コロナ禍が終わり数年が経ち、街ではマスクを外す人も増えた。観光地には人が戻り、学校生活も以前とほとんど変わらない。しかし、「もう大丈夫」と気を緩めてしまうことは危険だ。感染症も引き続き、天災による大きな被害は、私たちが忘れたところに再び引き起

こされることが多い。感染症がなぜ恐ろしいかと言ったら、誰もが感染し感染させる可能性があるからだろう。特に電車や学校、商業施設などの3密(密集・密閉・密接)が起きる場所ではウイルスは簡単に広がってしまう。

また、「自分の症状が軽い＝大丈夫」と思っている人も、高齢者や持病のある人にうつしてしまい、重症化することも多い。実際問題、新型コロナウイルス感染症による死者は去年だけで2万人以上に及び、その多くが80歳以上だと見られている。自分一人の問題ではないからこそ、一人一人の行動がとても重要になるのだ。

感染予防として基本となるのは、手洗いや換気、咳エチケット、そして無理をしないことだ。コロナ禍では当たり前のように行われていたが、最近では意識されなくなってきたように感じる。しかし、これらは特別な

ことではない。例えば、外出後に石けんを手を洗うだけでも、多くの感染リスクを減らすことができる。体調が悪いときに無理をして登校や外出をしないことでさえ、周囲を守る行動につながるだろう。

また、SNSなどで広がる不確かな情報にも注意が必要だ。コロナ禍では、根拠のない噂や誤った情報が多く拡散され、人々の不安をさらに大きくしてしまった。「〇〇を飲めば治る」といった信じやすい性が低い情報や個人の感想を鵜呑みにするのではなく、正しい情報かどうか自分で確認する姿勢が求められる。

感染症対策は、自分の行動を阻害しようとしないのではなく、周囲の人を思いやり、安心して生活できる社会を守るための行動である。新たな感染症の話が出てくる今こそ「コロナ禍」という経験の思い出し、日頃から予防を心がけていくべきだ。(一部省略)